



## 志度高だより 一飛翔の窓

第97号  
(H22.6.4.)

### 「人心一真なれば」

中国の処世訓の最高傑作の一つとされる、洪自誠の『菜根譚』に次の一節がある。「人心、一真なれば、便ち霜をも飛ばすべく、城をも隕すべく、金石をも貫くべし。」人が本気になれば夏に霜を降らすこともできるし、城を陥落させることも可能である。また、金属や石をも貫くことができる。なるほど。大仰に聞こえるが、処世訓だからこれくらいのハッタリをきかせるくらいでちょうどいい。ある本を読んでいると、これに似た文言に出くわした。内容は、人が真に願えば、宇宙をも味方に付けて、その人の願いを叶える、というものだ。何事にも真摯に、そして真剣に取り組めば、人だけでなく宇宙をも味方に付けてしまうというのである。含蓄ある言葉である。

話は変わるが、漢の時代に李広という有名な将軍がいた。射術の名人で、匈奴（異民族）に恐れられていた。彼の逸話であるが、李広は石を見て、それを虎と間違っ一心に弓を絞り矢を射たら、石を砕くほど矢が石に食い込んだ。ところが他日、今度は石を見て、それが虎ではなくただの石だと理解した上で矢を放ったら、矢は見事に跳ね返されたという。このことから「一念岩をも徹す」というようになった。

先日、職員会議の資料で私のつぶやきなるものを書いた。内容は、お前（私自身のこと）は何事にも本気でやっているか、というものである。朝、走っているとき色々なことを考える。私にとって朝のランニングは思索のひとつときでもある。その日、私は「どうして人はこの世に生まれてきたのか。どう生きてらいいのか」と考えていた。これまで何度も考え、そして答えが出ない難問だ。で、その日の落としどころといえば、「何事も本気でやらなければ答えは見えてこない」。そういうちょっと騙しのような結論だった。世に名を為す人は、それなりの苦勞と努力をして君子の域に達した。私のような凡夫というか小人にはとうてい真似のできないことであるが、それでも年月を重ねると、少しなりとも人間的成長はしてみたいと思う。その朝思ったことが「本気」である。

人生は喩えて、「邯鄲の夢」とか「槿花一朝の夢」と言われる。その短い期間の中で、一度や二度くらい本気になることがなければ、生きる喜びというか価値を知ることはできないのではないか。寝食を忘れ、取り憑かれたようにひたすら一つのことに打ち込む。石の上にも三年。畳の上にも三年。一輪車の上にも三年。電線の上にも三年。とにかく何でもいい、三年は辛抱して打ち込むのだ。ところが、俺にはこういう本気があったのか？ 現在の優柔不断な自分の原因は、何事につけ中途半端だったからではないか。軟体動物みたいに、あっちにころり、こっちにころり。気が向くままのつまみ食い生活。本気に近かったのは酒を飲むことくらいだ。気づけば今年五十七歳。



今年は石川啄木の『一握の砂』が上梓されて百年目だそうである。彼は1886年に岩手県の常光寺という寺に生まれた。『一握の砂』『悲しき玩具』に代表される短歌は、今以て日本人の詩情に訴える。が、彼は短歌とは裏腹に傲慢で自意識過剰だった。自らを天才と称し、一種の鼻つまみ者だった。夏目漱石の『吾輩は猫である』を批評して、「あんなものは一晩で書ける」と豪語したほどだ。だが、誰も彼の才能を認めようとはせず、やがて失意のうちに暗渠の底に落ち、人生の辛酸を嘗める。そしてようやく今多くの人たちに愛される石川啄木が生まれることとなる。

〈柔らかに 柳青める 北上の 岸辺目に見ゆ 泣けとごとくに〉これは私が小学三年か四年のときに父から教わった一句である。何度も言われ、覚えた。私はこの一句を大学生になるまで視覚的に捉えていた。すなわち、北上川がゆるやかに流れている。長い冬も終わり春の到来とともに、柳が芽吹き岸辺が涙するくらい美しくなった、と。しかし、違った。啄木一家は常光寺を追われ、泣く泣く岩手を離れなければならなかった。北上川を渡るときの悔しい思いがこれだ。

私もあと三年半で定年。人生の第4コーナーを回ろうとしている。一つくらい「本気」があってもいい。でなかったら後悔する。人心、一真なれば、一つくらい足音でなく足跡を残せるのでは…。そう思う昨今である。因みに、啄木は二十六歳で生涯を閉じた。